

J T A 2 0 0 9 年 度 方 針

J T A は「素心の武道場」を目指します

2 0 0 9 年 1 月 2 2 日

日本テコンドー協会

会長 河 明 生

2 0 0 8 年度日本テコンドー協会（以下、J T A）総会（2 0 0 8 年 1 1 月 8 日開催）において、私・河明生は「J T A 会長」、「J T A 理事長」、「J T A 宗師範」の J T A 三役を引続き兼務することになりました。

以下において「J T A 2 0 0 9 年度方針」を述べます。

目次

、 J T A のありかたー J T A は「素心の武道場」を目指します

、 2 0 0 9 年度 J T A 方針

一、 J T A 2 0 0 9 年度改革ークラブ制等

二、 J T A 七戒（除名・退会基準）明文化

近年、克己の精神や礼儀礼節、社会性・公益性を重視する「J T A 七大精神」等への共感、尾崎圭司等の K - 1 M A X での活躍等によるフルコンタクト・テコンドーの実戦性の認知、世界で唯一の蹴り技主体の型 = 蹴武の型等を特長とする蹴美を極める蹴武という独創性等が評価され新たな会員層が増加しております。

従来の J T A は、2 0 歳前後の青年層、とくに大学生が中心でしたが、最近では別ある 3 0 歳以上の男女の壮年・熟年層、少年少女部、とくに兄弟姉妹間のコミュニケーションをはかる兄弟姉妹テコンドー、親子のコミュニケーションをはかる親子テコンドー等が増加しております。より広範囲な年齢層の人々、様々な分野で活躍されている人々が、数ある武道の中で、J T A を選択していただいていることに喜びを禁じ得ません。

私は、J T A のトップとして会員の皆様が、日本跆拳道 = フルコンタクト・テコンドーを修得することに誇りを持てるような、そして数ある武道の中で J T A を選んで本当に良かった、と実感していただけるような武道および組織に発展させることが使命であると考えています。

、 J T A のありかた

J T A は「素心の武道場」を目指します

J T A の道場のありかたについて述べます。

私は、J T A は「素心の武道場」を目指すべきだと考えております。

「素心」とは何か。

「素心」は、陶淵明（とう・えんめい、365 - 427、「桃源郷」の語源となった詩を詠む）の詩を語源としております。

陶は、不正腐敗・私利私欲の俗人に悩まされ、度々官職を辞し、貧しいながらも晴耕雨読の隠遁生活を志しました。やがて陶は南村という田舎に引っ越し、次のような詩を詠みました（訳・河）。

昔欲居南村（昔、南村に住みたいと欲したのは）

非為ト其宅（占いによるものではない）

聞多素心人（ここには素心の人が多いと聞き）

樂輿数晨夕（ともに楽しく暮らしたいと思ったからだ）

懷比頗有年（長い間、考えてきたが）

今日從慈役（今日、それがかなった）

< 以下、詩を省略 >

安岡正篤（在野の漢文学者、「平成」元号創始、故人）によれば、

「人間の心はもともと純真なものですが、名利を追うに連れて汚れに染まり、欲望や野心からさまざまな色がついてきます。

そんな汚染や着色を嫌って、本来の純真に返った心のことを中国の詩人の陶淵明は素心と呼んでいます」（塩田潮『昭和の教祖 安岡正篤』文藝春秋、189p）

遺憾ながら現代の日本は、素心とはほど遠い、不正と私利私欲が蔓延している

— 他人を信じられない世の中

になりつつあるといっても過言ではありません。

では、こういう世の中で、どのような人々が J T A で汗を流しているのでしょうか？

また、多種多様な人々が J T A に入門する動機はいったい何でしょうか？

私は、J T A の地盤・神奈川や東京都内はもとより、地方大会、審査、セミナー等により、地方の J T A 会員と接する機会を与えられています。

J T A では、唯一、J T A 構成員の実態を自分自身の目で確認することができます。

地方の J T A 会員の多くは、J T A テコンドーを純粋に、まじめに、学んでいます。

なかには、J T A テコンドーを生き甲斐にしている会員もあり、彼らの純粋な眼差しに接する都度、前述した使命感が強化されます。

昇級審査の都度、私が熟読している白帯小論文課題「日本跆拳道入門の動機と抱負」には、
「自分をかえたい！」
「子供の頃、華麗な蹴り技に憧れており、自分も華麗な蹴り技を蹴れるようになりたい！」
「自分の愛する家族を守る術を習得したい」
「成長している自分が実感できて嬉しい」
「はやく仕事を終えて道場へ行きたいと感じる」と書かれています。

白帯の受験者が提出した小論文の基調に溢れている精神は、向上心だとみなせます。

この殺伐とした世の中で、あえて武道に入門する人々は、

人間本来の純真に返った心 = 素心

に回帰し、もしくは潜在意識の中で素心を求めているのではないかと思われてなりません。

私は、このような人々が存在するからこそ、日本の良心はまだまだ健全であると信じて疑いません。

学校や職場は、望んで入ったわけではないかも知れません。

また望んで入ったとしても、望んで在籍・在職しているわけではないかも知れません。

しかしながら、J T Aの道場は、望んで入り、望んで継続しているはずで

そうであるとするならば、自分自身のためにがんばっていただきたいのです。

—自分が望んで始めたことは、初志貫徹、昇段まではがんばる！

そのような姿勢の積み重ねこそが、

世の中に流されない自我の確立、自分なりの幸せの近道ではないかと思われてなりません。

私は、J T Aの道場では、

指導する側も学ぶ側も、

年齢、性差、職業、地位等を白紙に戻し、

ビジネスと称する金儲けや男女交際等の世俗的な価値観および態度とは一線を画し、

J T A道衣に身を包むことで同じ武道を学ぶ同志としての連帯意識をもち、

人間本来の純真に返った心 = 素心に戻り、

日本跆拳道で純粋な汗を流していただくことを理想とします。

つまりところJ T Aは、純粋な向上心を満たせる道場、素心の武道場を目指したいのです。

そのためにも、昇段後も、

日本跆拳道の道を全うしているJ T A加盟クラブの指導者や先輩有段者は、

先人として矜持と責任を自覚し、

日々研鑽を怠らず、向上心および素心を忘れてはならないと考えます。

そのような姿勢を堅持することで、年齢・性差・職業・地位等を超えて、

弟子・生徒・後輩からの信用と信頼を勝ち得るものだと私は確信しております。

、 2009年度JTA方針

一、JTA2009年度改革

JTAは、純粋な向上心を満たせる道場、素心の武道場を目指すべく次のように改革する。

1、JTAの組織改革

1) 「支部」と「支部長」の呼称廃止。

それぞれ「JTA加盟 **テコンドークラブ」、「クラブ長」とする。

例) 旧 JTA 東京城南支部 支部長・鈴木太郎
新 JTA 加盟 東京城南テコンドークラブ クラブ長・鈴木太郎

理由

JTAは地域社会に根を下ろした社会教育武道団体を志向している。

ただ単に、肉体的強さだけを求めているわけではありません。

「JTA七大精神」に明記してあるとおり、
日本跆拳道の鍛錬を通じて「克己の精神」や「礼儀礼節」等を尊ぶ精神を涵養することで
地域社会に貢献する有為な人材の輩出を目指しています。

名は体を表すといいます。

上記の理想を実現する上で、団体の呼称は重要です。

かつて「サッカー不人気国・日本」を改革すべく、従来のクラブ名から企業名を廃し、
地域名を冠したJリーグの成功事例を見習うべきです。

また、JTAは常設道場が1つしかない純粋なアマチュア武道団体です。

練習場所に公共施設等を使用してる場合、

たとえば、従来の「JTA東京蒲田支部」よりも

「JTA東京蒲田テコンドークラブ」が名称的に適切であると考えます。

2) JTAの正指導員以上の資格を有する者が、JTA本部の事前承認を得て、

二つ以上の複数のクラブを運営・管理している場合に限り、

当該統括管理責任団体を「**道場」と呼称し、それを各ホームページ上に明記します。

例) 日本テコンドー協会加盟 統括管理責任・鈴木道場
東京城南テコンドークラブ&東京蒲田テコンドークラブ

3) 不況下に鑑み、既存のクラブを統合し、人的資源を最も適切なクラブに集中させます。

理由

J T A の「財産」の一つは、人的資源 = クラブ長です。
クラブ長の向上心に満ちた健全な精神および優れた指導技術こそが J T A の「財産」なのです。
そしてそれを堅持するためには、クラブ長自身の精神および肉体が健康でなければなりません。

私は J T A 創立以来、終始一貫して
「定職もしくはそれに準じる職をもちながら J T A の道場を運営するように」と指導しており、
クラブ長の大部分が定職を有しております。
それが「J T A 七大精神」の「文武両道」なのです。

しかし、現在、日本は世界的な金融危機による不況下にあり、
クラブ長の雇用状況も安泰であるとはいえませんし、同じことは社会人の会員にもあてはまります。
このような状況下では、
クラブ長が無理をして仕事を調整しながら複数のクラブを異なる日時に運営していたとしても、
社会人会員の出席率が低くなることが予想されますし、それを責めるわけにもまいりません。

仮に、そうなった場合、クラブ長のストレスがたまり、健康を害することを私は憂慮しています。
それでは、優れた指導は不可能です。

そこで J T A 本部方針として、
人的資源を最も適切な日時および場所を有するクラブに集中させるべきだと考え、
クラブ長と協議の末、既存のクラブの統合（もしくは廃止）を推進しております。

幸い J T A は、東京城南 T C 以外、常設道場はありませんので、統合はスムーズに実施できます。
日本経済が不況を脱し、後身の指導者層が育った時点で、再開したいと考えています。

2、J T A の審査改革（近日中に新課題を公開）

- 1) 1 階級昇級受験者に対する「保留」制度実施
緊張等により昇級課題を失敗した場合、「保留」とし、
次回審査時の受験に限り、無料で受験できるものとします。
ただし、次回審査を受験しない場合、失格とします。
失格の場合、あらためて昇級審査料を納めなければならない。
- 2) 1 階級昇級受験者に対する昇級課題の軽減
具体的には各種約束組手の課題を二つ減らします。

3) 6級の橙帯を廃止し、水帯(みずおび=空色)とする。

理由

J T Aの「ナショナルカラー」は、誇り高き青(プライドブルー)と、さわやかな志をあらわす水色(空色。スカイブルー)です。ゆえに、もともと橙帯ではなく、「ナショナルカラー」の水帯を予定しておりましたが、帯製造業者が「水帯は光に弱く、色が落ちやすいため在庫できない」等の理由で断られた次第です。

しかし、J T Aは「こだわりの武道」です。

どうしても「ナショナルカラー」の水帯を導入したいと考え、大量発注および一括引き取り等の条件を提示することで業者の説得に成功しました。

4) 少年少女部の昇段審査は、2回受験を義務づけます。

ただし、蹴武の型等で入賞している場合は、1回受験を許可します。

理由

子供の頃は、階段はひとつひとつ上る、という姿勢を涵養すべきです。

また、1回受験では、合格点に達することが難しいため

3, 全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会改革(後日、公開)

4, その他-「年度ごとのJ T A年会費納入基準」

J T A年会費の納入日を2月27日とします。

理由

従来、年会費の納入日は、4月27日でしたが、年度途中であるため、事務処理上、問題が生じていました(たとえば、4月25日に退会した会員は、年会費を納める必要があるか否か、そしてその返金業務等)。

J T Aには事務方を新たに雇用する財政的余裕はありませんので、合理化する必要性がありました。そこで分かり易い基準 = 「年度毎のJ T A年会費納入基準」にあらためます。

たとえば、

「2009年度の年会費は2009年にJ T A加盟クラブに在籍している会員は納めていただく」ことにします。ただし、大学体育会の4年生部員で、引退している場合は年会費は必要ありません。ご理解のほどよろしく申し上げます。